

外国語だより

Vol. 6

VOICES FROM THE FOREIGN LANGUAGES SECTION, INSTITUTE FOR LIBERAL ARTS, Vol. 6

目次

特集 オンライン環境と外国語学習

ネット上の動画で学ぶスペイン語	渡辺 暁	3
オンライン・コンテンツでロシアを楽しもう	河村 彩	5
1992年のユーチューブ	三ツ堀 広一郎	7
厳選素材で語感を磨こう	戦 暁梅	9
映像・インターネットで親しむドイツ語	山崎 太郎	11

特別寄稿 ライティングセンターより

読者を意識して書く ―曖昧な口語をチュータリングする―	小泉 勇人	13
-----------------------------	-------	----

研究室から

新任教員のご挨拶：東工大着任に至るまで	赤羽 早苗	15
---------------------	-------	----



TAKI PLAZA: Provided by Kengo Kuma and Associates

ネット上の動画で学ぶスペイン語

リベラルアーツ研究教育院外国語セクション

准教授 渡辺 暁

東工大のスペイン語の授業では、実際に話されているスペイン語や、現地の文化や社会にふれるため、動画や映画をなるべく使うようにしています。ここではすぐに見られるネット上の動画を中心に、そうした映像の一部をご紹介します。ジャンルとしては、スポーツ、音楽、食文化、の順で行きたいと思います。本当は映画も、と思い、下書きの段階では映画から書き始めたのですが、それだけで制限文字数を大幅に超えてしまったので、またの機会にしたいと思います。なお、ここでご紹介する動画は、聞き取りやすさなどの教材としての適切さというより、内容や面白さを重視で選んでいます。まずはこうした動画でモチベーションを高めてもらい、少しでも聞き取れる・わかる部分を増やしていってもらえたら、と思っています。

スポーツ

サッカーやテニス、自転車など、スペイン語圏の選手が活躍したり、またスペイン国内リーグが強いスポーツ競技のおかげで、スペイン語に興味を持ったという人も多いと思います。興奮が伝わってくるスペイン語での実況や、好きな選手のインタビューを聞き取れたりしたら、うれしいですね。私のおすすめの動画は、メッシ選手の2015年スペイン国王杯決勝戦（Messi gol 2015 copa del reyなどで検索）と2014年ワールドカップでのボスニア戦でのゴールシーンの実況です。アナウンサーがどんなことを言っているかを授業で解説したりしています。

また、2010年のワールドカップでスペイン代表が優勝しましたが、その一年後に放映された回顧番組もおすすめです（“El gol de Iniesta Mundial Sudáfrica 2010”というタイトルでYouTubeにあります。2011年3月26日公開、長さは2:03です。）。選手たちが当時を振り返ってコメントをしていく、というもので、イニエスタ選手の落ち着いた語り口、そしてトレス選手の「みんなのゴール（el gol de todos）」という一言が私は大好きです。

昨年（2021年）12月の授業では、バロンドール賞の受賞演説を聞きました。史上最多の7回目の受賞を果たしたメッシ選手のスピーチもさることながら、女子部門のアレクシア・プテヤス（Alexia Putellas）選手の話がすばらしく、発音もとても聞きやすく、これから毎年授業で使おうと思っています。ぜひご覧下さい。

音楽

ネットのおかげもあって、いわゆるラテン系の音楽や、ス

ペインの伝統音楽やフラメンコなど、スペイン語圏の様々な音楽にふれる機会が増えていますが、歌というのは、語学の学習にとってもよいツールです。東工大で授業を担当して下さっている木村秀雄先生（東京大学名誉教授）は、歌にはリズムがあり、いい曲であればそのリズムが歌詞のスペイン語のイントネーションによく合っているの、いい歌を歌うとそれだけで発音のいい勉強になる、と、常々おっしゃっています。

スペイン語圏には数多くの名曲があり、名歌手がいますが、ここではキューバ生まれの大歌手、セリア・クルス（Celia Cruz）さんのことを紹介しておきます。彼女はキューバ革命後にアメリカに移住し、アメリカのヒスパニック社会を中心にスペイン語圏全体で愛された人です。セリアさんの晩年、彼女を称えるために広大なスペイン語圏の国々から集まった人気歌手たちが、彼女のヒット曲を歌ったトリビュート・コンサートの映像を、YouTubeで見ることができます（celia cruz azucar homenaje completoで検索すると、コンサート全体の映像が見られます）。その最後、ヒット曲“Yo vivire”（私は生き続ける!）を歌手の皆さんたちがメドレーで歌っているシーンを、毎年授業のどこかで見せるようにしています。（なお、歌の練習に一番おすすめなのは、“Tu voz”（=Your Voice）という曲です。このコンサートの中では、メキシコの人気歌手、アナ・ガブリエルが歌っています。）

スペイン語のいいところは、広いスペイン語圏に様々な歌のスタイルがあること、です。例えばタンゴの名曲ボルベール（Volver = 帰郷）は、元は1935年にタンゴの神様と言われたカルロス・ガルデル（Carlos Gardel）が歌った曲ですが、2006年にはそのフラメンコバージョンが、スペインの映画監督アルモドバルの同名の映画（ボルベール）の劇中歌として使われ（Penélope Cruz Volverなどで検索）、また、メキシコの人気歌手ルイス・ミゲル（Luis Miguel）にもカバーされています。このように、一つの名曲が時代や地域を超えて歌い継がれていく、というのは、スペイン語の素晴らしいところだなあと感じます。

料理

スペイン語は多くの国で話されていて、それらの国々は独自の食文化を持っていて、さらには世界的にもおいしい食べ物や料理で有名な国々です。今は閉店しましたが、スペインにあったエル・ブジ（El Bulli）というレストランは、長いこと世界一のレストランとして知られていました。そのエル・ブジのシェフとして知られるフェラン・アドリア（Ferrán

Adriá) や、ペルーのガストン・アクリオ (Gastón Acurio) らは、スターシェフとして知られていて、彼らの名前を検索するだけで、多くの動画が出てくるとは思います。それ以外にもたくさんの動画があります。

●スペイン料理のレシピ (receta) :

“En casa contigo” というスペインの女性向けサイトの料理コーナーが私のお気に入りです。特にスペイン風オムレツ (tortilla española) の回は、毎年どこかのタイミングで授業でも使っています (tortilla española en casa contigo で検索)。パエージャ (paella = パエリア) やガスパチョ (gazpacho) などの有名な料理になれば、たくさん動画が上がっていますが、少し見て、気に入ったものを見てもらえたらいいのかな、と思います。パエージャならバレンシアが本場なので、paella valenciana というキーワードで検索したり、本物の、という意味の、auténtica という言葉を追加すると、また別の動画が出てきたりするかも知れません。また、最初にご紹介した en casa contigo のようなお気に入りのサイトを見つければ、そこでいろいろな料理の動画を見ることができるとは思います。

●ペルー料理

ペルーの食文化は、もともとのアンデスの先住民文化、征服によって持ち込まれたヨーロッパの文化に加えて、19世紀以降入ったアジアの文化がまざって生まれたものです。チャウファというお米料理 (chaufa: もちろん炒飯が原型ですが、今や完全にペルー料理!) もありますし、ロモサルタード (lomo saltado) という料理も、具材はともかく (牛肉やフライドポテトが入っています)、調理法は中華の影響をはっきり受けています。

ペルーは日本からの移民の多い国で、cocina nikkei (ニッケイ=日系、cocina = 料理) ということがジャンル名として定着しています。また、和食の有名人といえば小西紀郎 (Toshiro Konishi) さん。日本企業のCMから力強いスペイン語でのインタビューそして歌まで、多くの動画が見られます (“Sonidos y Sabores del Mundo - Toshiro Konishi” など)。若い世代では、Tomás Matsufuji さんという日系の方 (化学の博士号をお持ちです) のセビーチェ (魚介のマリネ) の店 “Al Toque Pez” の動画を見ていると、お客さんたちの楽しそうな様子が伝わってきます。

最初に紹介したガストンさん (彼の人気はスポーツ選手並みだそうです) も含め、彼らの名前を検索すると、いろいろな動画が出てきます。ペルーの食文化に加えて、それを取り巻く社会の様子を垣間見ることができて、とても面白いと思います。

●メキシコ料理

メキシコ料理、私は留学していたこともあって大好きです。おすすめしたい動画もたくさんありますが、まずは私たちがメ

キシコシティに行くとかならず行くタコス屋さんをご紹介します。ハマイカ市場というところにある carnitas paty というところ (tacos de carnitas mercado de jamaica で検索)。このメルカード (=マーケット: もともとお花屋さんが集まっているので有名などころ) の様子も含めて、動画で見てくれるとうれしいです。

今年度の授業では、講師の永田夕紀子先生が、Netflix の “Las Crónicas del Taco” という番組 (日本語タイトルは「タコスの全て」)、そして YouTube で人気になった、“Lady Tacos de Canasta” の名で知られる女性の動画を紹介して下さいました。彼女の「タッコオオース」という掛け声はうちの子供達にも大人気です。

おわりに

最後にもう2つ、動画をご紹介します。一つは中米の先住民言語のマヤ語についての、“The complicated linguistics behind how the Maya talk about the past” という動画で、講師で言語学者の佐々木充文先生が教えて下さいました。スペイン語では動詞の過去形が二種類あるなど、時間のとらえ方が重要な文法のポイントなのですが、この動画はではどのように過去を表現するか、を説明していて、言語によってさまざまなやりかたがあることがわかります。

そして大トリは、タコスの動画をいろいろ物色して見つけた、“Japonés haciendo tacos callejeros en japon! México cambió mi vida!” という動画です。日本に住むメキシコ人の YouTuber による、関東周辺でタコスの移動販売をしているやまとさん (実は私も何度かお会いしたことがあります。instagram: tacos_3hermanos_df) へのインタビュー動画で、2021年12月22日に公開されて以来、1月末までになんと98万回再生され、コメント欄はスペイン語のメッセージで埋め尽くされています!

これ以上ネタを探していると YouTube 中毒になりそう、というところで、紙幅もつきましたので終わりにしたいと思います。自分がスペイン語を学んでいた頃のことを考えると、ネットを通じて無限の生きた教材に触れることができる皆さんはうらやましいです。CD がかるうじて手に入っても、歌詞はついておらず、ああでもないこうでもない聞き取りを試みていたのが懐かしいです。さらに言えば、SNSなどでスペイン語圏に友達ができれば、ふつうに会話もできます。現地に行けるようになるのは先でしょうが、そんなすばらしい環境を活用して、ぜひ語学も身につけていかれてください。

追記:冒頭に触れた、おすすめ映画も含めたこの原稿の「完全版」ですが、外国語セクションの論文集『ポリフォニア』の第14号 (2022年3月刊行予定) に書いた論考の「付録」として、載せてもらえることになりました。よかったらご参照下さい。執筆に際してお世話になりました、『外国語だより』編集委員の戦先生、『ポリフォニア』編集委員の河村先生、そして情報を提供して下さった、木村先生、永田先生、佐々木先生に、あらためてお礼申し上げます。

オンライン・コンテンツでロシアを楽しもう

リベラルアーツ研究教育院外国語セクション

助教 河村 彩

動画やオーディオブックを利用すれば、日本にいながらにして外国語を聴くことができ、その国の文化を楽しめる。ロシア語も例外ではなく、ロシアのコンテンツは意外にも充実している。外国語の授業ではどうしても文法と読み書きが中心になってしまうが、オンライン・コンテンツを利用すれば、自分の興味を広げながら、ロシア語の実践的な能力も身に付けることができるかもしれない。

語学学習

語学学習サイトで優れているのは、なんといっても東京外国語大学が作成した「東京外国語大学言語モジュール」(<http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/>)だ。このサイトではロシア語や英語を含む23ヶ国語を基礎から学ぶことができる。マイナーな言語も含まれており、語学好きはホームページに並んだ言語の一覧を見るだけで、目の前に広い世界が開けた気がするに違いない。コンテンツはネイティブによるダイアログから成り立っているので、ひととおり文法を終えた学習者が実践的な会話を身につけるのにもぴったりだ。

ロシアの国際教育センターが作成した「ロシア語でしゃべる時間ですよ Время говорить по-русски!」(https://www.irlc.msu.ru/irlc_projects/speak-russian/time_new/)はロシア語を学びたい外国人向けのサイトで、嬉しいことに日本語のページもある。クレイ・アニメーションによるダイアログは「空港で」「ホテルで」「レストランで」というようにシチュエーション別になっており、現地に旅行に行く前に学習しておくに役に立つかもしれない。ゲーム感覚で挑戦できる単語や文法テストも準備されている。

また、一橋大学語学ラボラトリーのサイトには、学習に役立つ世界中のロシア語学習サイトが紹介されている(http://www.rdche.hit-u.ac.jp/ll/hint/ru_rcmd_sites.html)。アメリカの大学の語学学習サイトなども紹介されているので、英語に苦手意識がない人はロシア語学習の幅が広がるだろう。

ロシアを楽しむ動画

YouTubeにはロシア最大規模の映画制作会社モスフィルムがチャンネルを持っており(<https://www.youtube.com/c/MosfilmRuOfficial>)、多くの映画が無料で公開されている。古い映画が多く、「モスクワは

涙を信じない Москва Слёзам не верит (<https://www.youtube.com/watch?v=X7GuhjGZ-xs&t=510s>)はソヴィエト時代の名画のひとつ。意図せずシングルマザーになり、苦勞して自立する主人公を中心に、友人たちとの友情と成長が描かれる。現在では少しレトロに感じられるソヴィエト時代のモスクワでの日常生活の様子がよくわかる。「運命の皮肉、あるいは良いお湯を！ Ирония судьбы, или с лёгким паром!」(<https://www.youtube.com/watch?v=IVpmZnRIMKs>)は友人とサウナに行き、年末パーティで酔っ払った男性が、飛行機に乗って別の街に到着し、自分のアパートと間違えてとある女性の部屋に忍び込んだことから始まるロマンティックなコメディ。年末の風俗や華やいだ雰囲気がよく出ており、ロシアでは大晦日の定番映画となっている。残念ながらモスフィルム・チャンネルには日本語字幕はないが、英語字幕やロシア語字幕が選択できる。またこのチャンネルでは芸術性の高い作品で世界的に有名な、タルコフスキー監督による映画の多くも無料で見ることができる。

新しい映画やドラマを見るならば「キノ・ベース」(<https://kinobase.org/>)というサイトが良い。日本のGyaoやTVerのロシア版といったおもむきで、比較的新しいドラマシリーズや映画、アニメが掲載されている。おすすめはロシアの大学生の寮での生活を描いたコメディ「ユニヴェル Универ」(<https://kinobase.org/serial/8861-univer>)。恋愛、テスト、アルバイト、クラブ活動などロシア人の学生がどのように過ごしているのか知ることができる。「ユニヴェル」は10年以上続く大人気ドラマで、2008年の初回放送時には学生たちは古い大学寮で貧乏暮らしをしていた。現在の「新しい寮 Новая общага」シリーズではきれいで快適な部屋に引っ越し、登場人物たちも入れ替わっている。ロシアの学生や生活の変化も見取ることができる。

ロシアを代表する二大オペラ・バレエ劇場であるモスクワのボリショイ劇場(<https://www.youtube.com/user/bolshoi>)とサンクト・ペテルブルクのマリインスキー劇場(<https://www.youtube.com/c/mariinsky>)もYouTubeのチャンネルを開設している。内容は、ダンサーや音楽家へのインタビュー、当該シーズンのレパトリーの紹介などが多いが、コロナ

禍に見舞われた2020年にはステイホームを余儀なくされた世界中のオペラ・バレエファンのために、期間限定で注目の舞台を公開していた。チェックしていれば今後も貴重な映像に出会えるかもしれない。

世界でも最大規模を誇る美術館、サンクト・ペテルブルクのエルミタージュ美術館も英語とロシア語両方で多くのコンテンツを提供している(<https://www.youtube.com/channel/UCQkXs-5n3awzvGOSvxRsOzw>)。エルミタージュ美術館はレオナルド・ダ・ヴィンチやレンブラントを含む世界の名画のみならず、豪華な工芸品や、考古学的・民俗学的にも貴重な所蔵品を多数展示している。YouTubeのチャンネルでは収蔵品の見どころや、作品をテーマ別に解説した動画を多数公開している。また、美術館の建物は皇帝が居住する宮殿でもあった。美術館とロシアの歴史を振り返りながら、皇帝が統治していた時代と、宮殿に居住した皇帝のインテリアを紹介する動画も興味深い。栄華を極めたロマノフ王朝やロシア貴族の残した遺産は、ロシア語や英語ができなくても見ているだけで面白い。

社会主義時代のソ連では、実験的な集合住宅や大規模なホール、クラシックな高層ビルなど実に様々な建築物が建てられた。建築に興味がある人にオススメするのがYouTubeチャンネル「建築ざんまい Архитектурные излишества」(<https://www.youtube.com/channel/UCrBrH2HVtIA6-kk42E5m7yw>)である。このシリーズではリポーターが各地の建築を訪れ、ときには住人へのインタビューも交えながら、個性的な建築物の内外を紹介している。建築や建てられた時代の知識が身につくのみならず、動画によってはロシア人の知り合いの住居に招かれたような気分になるのも良い。

耳で感じるロシア

ロシアでどんなポップスが流行しているのか知りたいのなら、ラジオ局のサイトを訪れるのが良いだろう。「радио」と検索すれば、「オンライ・レッド Online Red」(<https://online-red.com/radio/>)などの様々なラジオ局をまとめたサイトがヒットする。オススメのラジオ局は「ロシア・ラジオ Русское Радио」と「ロシア・ヒット Русский Хит」(<https://ruhit.fm/news/8444.htm>)。ロシアで最もホットなヒット曲を一日中流しており、かけておくとロシアにいる気分になれる。「モスクワ FM Москва FM」(<https://www.mosfm.com/>)はおしゃべりが中心。ちょっとしたニュースや、日常生活を豊かにするライフハックなどのテーマが多い。

読書大国ロシアは、オーディオ・ブックも充実しており、ドストエフスキーやチェーホフといった有名作家の名作の多くは音声で聞くことができる。読みたいものがあったら「аудио книга」に作家名や作品名

をプラスして検索してみよう。無料で聴けるオーディオブックでは「オーディオブックの世界」(<https://miraudiobook.ru/>)が充実している。アルファベット順のカタログがあり、ロシアの小説のほか、探偵もの、歴史物、外国文学などのジャンルも網羅している。古典文学が充実しているサイトは<https://bibe.ru/page/3/>。ドストエフスキーの『罪と罰』をはじめとする名作がダウンロードできる。全般的に朗読の速度はゆっくりなので、ロシア語に慣れていない外国人にもありがたい。また下記で詳しく紹介する「ロシア文化」のサイトでも対象学年別に古典文学のオーディオブックが分類されている。(<https://www.culture.ru/tags/audioknigi>)

ロシア文化を知るためのサイト

ロシアの芸術に興味がある人にとっては、サイト「ロシア文化 Культура РФ」(<https://www.culture.ru/>)は圧巻だ。映画、文学、音楽、建築、演劇、伝統文化と様々な文化情報を網羅しており、タイトルを見るだけであつという間に時間が過ぎる。映画やコンサート、バレエ、演劇などの動画も多数掲載されている。動画は厳選されており、どれも最高レベルの見応えがあるものばかりだ。文学のページでは、作品のテキストをダウンロードして読むこともできる。有名な作品が多いので、日本語の翻訳と対照しながら読めば、ロシア語が上達すること間違いなし。他にもロシア中の美術館のマップや、文化に関する興味深い記事や芸術知識テストなどのコンテンツも充実している。

美術に興味がある人にオススメなのが「アート・ガイド Арт гид」(<https://artguide.com/>)。美術に関する記事のほか、開催中の展覧会情報もあり、美術館やギャラリーのまとめサイトの役割も果たしているので、ロシアに旅行する前に見たいものをチェックするのにとても良い。

外国語を上達する一番の近道は、自分の好きなことや興味のあることにアクセスすることだ。誰でも知りたいことがあれば、多少めんどうでも、辞書を引きながら内容を理解しようと努力するだろう。面白いコンテンツを夢中になって読んだり見たりしているうちに、外国語が上達していれば、しめたもの。言語をマスターするまでの道のりはそう遠くはないかもしれない。

1992年のユーチューブ

リベラルアーツ研究教育院外国語セクション

教授 三ツ堀 広一郎

今までで最も貪欲に映画を見たのは、大学1年から2年にかけてのことだ。動画のネット配信など、想像すらできなかった時代である。おまけに当時住んでいた6畳一間の風呂なしアパートには、ビデオ再生装置はおろかテレビ受像機さえなかったから、「動く画」を見るには映画館に足を運ばざるをえなかった。

映画館にはせっせと通った。若年期の「はしか」のようなものだったのだろう、映画熱が昂じていた一時期には、文字どおり日参した。日によっては、2軒、3軒とハシゴした。週末はコンサート会場やイベント会場に警備のアルバイトで出かけるのが常だったから、映画館に行くのは平日の昼間か、オールナイト上映がある夜間である。

だから大学の授業はよく欠席した。目当ての映画の上映時間に空きが出たときにかぎって、授業に出席した。私も含めた当時の文学部の学生には、そもそも授業に出る習慣がなかったし、大学も本気で教育をする気がなかったので、そんな片手間の学業生活でも、単位は取得できたのである（落とした単位も多かったけれど）。

そんなわけで、その頃に見た映画の記憶は、映画館の記憶と切り離せない。頻繁に足を運んだのは、昔の名画がかかっていたり、回顧上映などと銘打って2本立て、場合によっては3本立てで一人の監督の作品を「まとめ見」させてくれる、いわゆる名画座である。池袋の文芸座やACT セイゲイシアター、飯田橋のギンレイホール、早稲田の早稲田松竹、新宿武蔵野館、大井武蔵野館、中野武蔵野館……。

当時はミニシアターブームたけなわの頃でもあって、新宿のシネマスクエアとうきゅう、渋谷のユーロスペース、シネマライズ、ル・シネマ、日比谷のシャンテシネ、六本木のシネヴィヴァンといったあたりにもよく行った。語学学校の併設施設であるアテネ・フランセ文化センターや、専門家か物好きでなければ行かないような東京国立近代美術館のフィルムセンターにわざわざ足を運んで、意味のよくわからない古い映像を、ぼんやり見つめていた記憶もある。

ともかく、そういった映画館では、ヨーロッパや東アジアの芸術系映画、アメリカの独立系作品、黄金時代の邦画が、多くかかっていた。上京してきた途端に都会の知的スノビズムに染まってしまった私の外出時の目的地は、書店か映画館のどちらかだった。

そんな数々の映画館のうちでも、もはや現存しないACT ミニシアターは忘れがたい。早稲田通り沿いの雑居ビル。通りに面した1階は郵便局で、その脇の階段をのぼった2階が映画館、というより映写室とでも呼ぶべき空間である。玄関では靴を脱ぐ。靴を下駄箱に入れ、かろうじて10畳ほどの広さはあったろうか（じっさいはもっと広がったのかもしれないが、私の記憶に残っている空間を目測すれば10畳ほど）、とにかく座敷というほうがふさわしいような、やたら天井の低い空間にあがると、座席ならぬ椅子が所せましと並んでいる。そのひとつに座る。私の場合、あぐらをかくか、膝を抱える格好で腰を下ろすのである。スクリーンはすぐ目の前だ。手を上方に伸ばすと、背後のプロジェクターから放たれる光線をさえぎって、スクリーン上の映像を乱してしまったりする。

会員登録をすれば、学生にはじつに有難い料金で多くのフィルムを見られたから、私はここの会員になって、だいが通い詰めた。映画史上でも名の知れたサイレント映画（『月世界旅行』『戦艦ポチョムキン』『カリガリ博士』『アンダルシアの犬』……）や、一部しか残されていない無声時代の小津安二郎の作品（『大学は出たけれど』『落第はしたけれど』……タイトルだけでも身につまされる）を見たのはここだった。往年のフランス映画の巨匠ジャン・ルノワールの作品に初めて触れたのも、ここでたびたび実施されていたオールナイト上映でのことではなかったかと思う。

こうして東京の映画館に親しむうちに、映画のみならずカルチャー全般が織り成すネットワークに入り込んだのだ、という思いを私は強く持っている。たとえば渋谷のシネマライズにかかっていたレオス・カラックスの『ポンヌフの恋人』。冒頭で粒立ちの粗い画面がスクリーンに投影されるのに合わせて、コダーイの《無伴奏チェロソナタ》がこちらの耳を打ちつけにやってくる。その荒々しい曲調にすっかり痺れてしまい、コダーイの楽曲を好んで聴くようになった。その延長線上で、コダーイとおなじハンガリーの作曲家バルトークの曲を発見した（中沢新一の本でバルトークが持ち上げられていたことも大きかった）。またユーロスペースで見た、おなじカラックス監督の『汚れた血』。身体運動によって情動を表現することにかけては無類の俳優ドニ・ラヴァンの、あの唐突な疾走シーンに重ね合わせられるのが、デヴィッド・ボウイ

の《Modern Love》である。おかげで今でもデヴィッド・ボウイといえば、音楽的にも文学的にも意味深な《Ziggy Stardust》や《Space Oddity》ではなく、単細胞的な《Modern Love》の支持者でありつづけているのだが、ともかく一時期はデヴィッド・ボウイをはじめとするイギリスのグラム・ロックに惚れ込んだ。さらに言えば、ジャズを聴くようになったのはルイ・マルの代表作『死刑台のエレベーター』で流れるマイルス・デイヴィスのトランペットの響きに参ったからだし、19世紀の文豪バルザックの分厚い小説をたくさん読んだのも、フランス文学を勉強していたせいではまったくなくて、ヌーヴェル・ヴァーグの立役者トリュフォーの出世作『大人は判ってくれない』で、少年のジャン＝ピエール・レオがバルザックの肖像画に蠟燭の火を捧げる場面に感化されたからである（トリュフォー自身もバルザックの崇拝者だった）。

映画館で見る映画には中毒性がある。これはいいぞ、と思った映画は何度でも見たくなる。居ても立っても居られないような気持ちに駆られ、繰り返し見た映画はたくさんある。映画館にかかるフィルムは上映期間中しか見られない、つまり希少性があるだけに、なおさらこちらの渴望を掻きたてもしたのだろう。

そんなふうにして中毒になりかけた映画作家の名前を挙げれば、ジャン＝リュック・ゴダール、ジャック・リヴェット、ベルナルド・ベルトルッチ、テオ・アンゲロプロス、アンドレイ・タルコフスキー、ヴィクトル・エリセ、溝口健二といったあたりになる。川島雄三や鈴木清順の奇抜な絵作りにも強く魅了された。台湾映画では、『悲情城市』や『恋々風塵』の侯孝賢よりも、むしろ早世した楊徳昌（エドワード・ヤン）に熱狂した（3時間以上ある『牯嶺街少年殺人事件』を、上映期間中に、たしか3回は見た）。ヒッチコックやデヴィッド・リンチの作品も、繰り返し見たおぼえがある。その頃は、画面の様式美やカメラの長回しで魅惑するタイプの作品が好みだったのだろう。

それがいつしか、俳優の台詞まわしや、表情や、挙措に焦点をあてる作品へと、嗜好が変化していった。米国産ではジョン・カサヴェテス（おお、カサヴェテスよ、かつて汝の映画に私はどれほど打ちのめされたか！ おかげでピーター・フォークは『刑事コロンボ』でも『ベルリン・天使の詩』でもなく、『こわれゆく女』の俳優として記憶されている）、ウディ・アレン、ジム・ジャームッシュ、フランス産ではフランソワ・トリュフォー、エリック・ロメール、ジャック・ドワイヨンなどの作品を好むようになっていった。

いま思えば、こうした趣味の変化は、フランス語学習に本気で身を入れるようになっていった過程と軌を一にしている。映画でも、純粋な視覚表象より、広義における「言葉」の使い方が、私の関心の対象になっていったようだ。そうこうするうち、映画熱は冷めて

いき、かわりに同時代の未邦訳のフランス語小説を、次から次へと読むことに熱中するようになった。

*

以上の拙文に、外国語学習に役立つ話はひとつも出てこない。ここに披瀝したのは、益体もない、独りよがりな、とりとめのない思い出話にすぎない。ただし今から30年前、教科書や教室で習い覚えるのとはまったく違う、「生きた外国語」に私が触れはじめたのは、映画館でのことだった点は強調しておきたい。いや、「生きた外国語」は映画を通して学べどか、外国語の習得のためには好きな映画を繰り返し見るのも一法だ、などと言いたいわけではない。要領のいい学生なら、私などがわざわざ案内しなくても、自分に適した学習者向けの動画をネットですぐにさぐりあて、「生きた外国語」を享受していることだろう。今の時代、よくできたオンライン動画はあふれるほどあって、私にはもう追いつけなくなっている。

だが、学習用に作られた「動画」などでは飽き足りないのか、フランス語を勉強するのにおすすめの「映画」はありませんか、と質問してくる学生がたまにいる。おお、その意気や良し！ だから尋ねられれば応じてはいるのだけれど、旧世代の元映画ジャンキーは内心で、外国語学習のために映画を見るなんて、なんだか不純な営みだぞ、と思っている（勉強熱心な学生のみなさん、授業で映画を活用されている先生方、どうもすみません）。かつて映画そのものに耽溺し、そこから「生きた外国語」に引き寄せられていった身としては、まずは画面をじっと見つめてほしいのである。ねえ、お願い、こっちを見て。学ばまえに見よ。教室で、「生きたフランス語」に触れてみようなどと適当な口実をつけて映画を見せるたびに、授業時間をそっくり映画上映会にしてしまう悪癖が私から抜けないのは、たぶん以上に書き連ねた若年期の思い出のせいだ。

厳選素材で語感を磨こう

リベラルアーツ研究教育院外国語セクション

准教授 戦 暁梅

検索をかければ、地球の裏側の生の映像や音声にすぐアクセスできる便利な時代。外国語を学ぶためのリソースもひと昔に比べると格段に多くなった。こと中国語に関しては、YouTube だけを見ても、漢詩の朗読から歌番組、料理番組、ドラマなど、字幕付きのもので溢れ、時間さえあればキーワードを入れて、好きなものをどんどん見つけて視聴していくと、その分語学力も向上するに違いない。

だが、上級レベルの勉強に入る前、または入ったばかりの人には、そのやり方はあまりおすすめできない。玉石混淆の素材をまだ自分の力では見分けられないからだ。初級から中級の段階にこそ、厳選された、磨きのかかった文章で中国語の音感、語感を身につけてもらいたい。そして量よりも質を、さまざまなものを多読するよりも、すぐれた文章の数篇を自分の血肉になるまで何度も何度も読み込むことが大事だと思う。このような思いで、授業の補助としてネットで使っていたありがたいいくつかの中国語の素材を、ここに紹介しておきたい。

自然は語る（大自然在説話）

<https://www.youtube.com/watch?v=jEDyxkJbH1U>

短編映画シリーズ *Nature is speaking* の中国語吹き替え版。擬人化した自然——母なる自然、海、土、水、花、森、アカスギ……——の口から穏やかに語り、「自然は人間を必要としない、人間は自然が必要だ」という強いメッセージを伝えるもの。英語版はジュリア・ロバーツ、ハリソン・フォードなどのハリウッド俳優が吹き替えをしているが、この中国語吹き替え版も同じく、第一線で活躍している中国の大物映画スターたちが、それぞれ個性豊かな声で吹き替えをしており、中国語の音の心地よさが感じられるものだ。

このシリーズは、内容が短く、ゆったりとした語り方が特徴で、英語版と合わせて見ると、意味がすぐ理解できる。中国語入門の段階で、とくに発音の感覚がまだよくつかめないと感じる初級学習者の皆さん、ぜひこのシリーズを繰り返し聞いて真似して、中国語の発音の表現や抑揚をじっくり味わってみてください。

朗読サイト（朗読網）

<https://www.langsong.site/>

中国語の「朗読」とは、感情を込めて朗読すること。

詩歌や散文の朗読は中国の国民的娯楽と言っても過言ではない。日本の紅白歌合戦に相当する旧正月のテレビ特番や、「元宵節」、「中秋節」などの伝統的な祝日を祝うイベントでは、有名な俳優や声優による詩の朗読を取り入れることがしばしばある。また、数年前に中国中央テレビでは土曜夜八時のゴールデンタイムに始まった「朗読者」という番組が絶大な人気を集め、今も続いている。

この「朗読網（朗読サイト）」はその名の通り、とても地味なサイトである。華やかな映像がなく、写真に音声がついて、その下に朗読された文章の文字が付いているだけ。しかし音声の再生ボタンをクリックすると、息を呑むほど美しい中国語の音が流れるように耳に入ってくる。

ページが一番下までスクロールすると、「優秀朗読者」の名前が並んでいて、よく見ると、第一線で活躍しているアナウンサー、俳優や声優、なかでは、すでに他界した高名なアナウンサーの名前も見られる。とくに注目すべきは、喬榛、丁建華という——今の若者はあまり知られないかもしれないが、1980年代初期頃の中国を知っている方なら、きっと興奮を拭えないだろう——大物声優の名前もある。当時の中国では、まだテレビが普及せず、情報取得や娯楽の主要手段はラジオと映画だった。ラジオ小説やラジオドラマを担当するアナウンサーや、外国映画の吹き替えを担当する声優たちの名前が広く知られ、彼らは声だけで国民的大スターとなっていたのだ。

ここに名前のある喬榛や丁建華は、あの高名な上海映画翻訳所で活躍した声優だった。改革開放したばかりの八十年代初期、それまで文革期に非公開で「内部参考」として上海映画翻訳所で制作された外国映画の吹き替え版が公開放映されるようになった。これら大物声優たちの声とともに、中国人が外国映画を楽しみ、それを通して貪欲的に外の世界を見ていた。その後、外国映画が大量に中国に入るようになり、声優たちの声は、外国映画の吹き替え版を通じて中国人の心を虜にした。喬榛演じる『哀愁（*Waterloo Bridge*）』（中国語名『魂断藍橋』）のロイ・クロニン大佐の声、『男はつらいよ 寅次郎物語』（中国語名『寅次郎的故事』）の寅次郎の声、丁建華演じる『君よ、憤怒の河を渡れ』（中国語名『追捕』）の真由美の声、『レ・ミゼラブル（1978）』（中国語名『悲惨世界』）のコゼツ

トの声は、今でもあの時代を生きた中国人の記憶に深く刻まれている。

このような錚々たるメンバーによる朗読の作品が一般の朗読愛好者の投稿作品とともに、「朗誦網」に贅沢に並んでいる。そこで読まれる文章も幅が広く、選りすぐりの中外文学史上の名作ばかり。古典文学では、李白の「将進酒」や白居易「琵琶行」、蘇軾「赤壁賦」、近現代文学では魯迅の作品の数々、老舎の「済南の冬」、朱自清の「春」などなど。翻訳作品も内容豊かで、タゴール『園丁』、マクシム・ゴーリキーの「海燕の歌」、プーシキンの「もし生活が君を裏切っても」「冬の朝」、ボブディランの「風に吹かれて」と、それを踏まえて創作した台湾詩人余光中の「江湖上」も。日本文学では、川端康成の「父母への手紙」、徳富蘆花『自然と人生』のなかの「断崖」から、宮沢賢治、中原中也、金子みすゞ、谷川俊太郎など詩人の名作を朗読したものも多く見られた。

中国語中級の授業ではこのサイトから、朱自清の名文「春」を紹介したことがある。読み手の任志宏は中国中央テレビ局の名アナウンサーで、落ち着いた深みのある声で歴史、文学、藝術番組の司会やドキュメンタリー映画のナレーションの数々を担当してきた。「春」は、待ちわびた春が近づいた時の自然の様子を描いたエッセイ。主に景色の描写だが、文が短く、擬人の表現を多用し、中国語初級で学んだ文法でも十分楽しめる内容だ。音声を何度も復唱して読む練習をした学生が、読みながら景色が想像できたと喜んでくれた。

ただこのページでは作品の検索機能が使いにくく、やや不便に感じるかもしれない。その場合は、まず一番下の「優秀朗読者」の名前をクリックして、気に入った声を見つけて、その人の朗読した作品に辿っていくのが良いかもしれない。心の琴線に触れる作品、そして中国語でそれを読む音声にきっと出会うことができるでしょう。

China from above (鳥瞰中国)

<https://www.youtube.com/watch?v=vTckd3qWLCM>

ドキュメンタリー *China from above* シリーズの中国語版。アメリカのナショナルジオグラフィックチャンネルと中国五洲伝播センター (CICC) の共同制作で、英語で作ったものに中国語吹き替えをしたもの。英語から訳した中国語なので、言葉が平明で洗練されているのが印象的だ。自然景観、多元の文化、農業、交通事情、庶民の暮らし……さまざまな面から中国を紹介する内容になっており、ナレーションの間に、一般人へのインタビューも挿入している。ナレーションの含蓄のある文章用語に対し、インタビューの部分では鮮烈な口語の表現、各地域の方言、ないしは少数民族の言語も聞くことができ、中国文化の多様性を肌で感じることができる。もとの英語バージョン (中国語字

幕付き) も YouTube で公開されており、こちらと併用すれば、内容も理解しやすい。英語の勉強にも使えて、一石二鳥の効果が狙えるだろう。中国語上級の学習者におすすめしたい。

Sing My Song (中国好歌曲)

<https://www.youtube.com/watch?v=4ivO3srqZeM>

音楽創作者を発掘するオーディション番組。中国語中級から上級の学習者、とくに音楽好きな人におすすめ。オーディション番組なので、歌以外の部分の会話も中国語の練習として使える。挑戦者が出場する時の自己紹介、歌の由来、歌い終わったあとに審査員と交わした会話、どれも飾らない自然な口語を使っている。

この番組をいくつか見たなかで、とくに印象に残ったのは、シンガーソングライター・趙照が登場して「当你老了」(「あなたが老いる時」) を歌った回だった。この歌は、趙照がアイルランド詩人イエツの「あなたが老いる時」(When You Are Old) を中国語の歌詞として改編し、作曲したもの。この番組に出たあと、趙照が全国的に有名になり、この歌も大ヒット曲となった。また、その波及効果でイエツの訳詩集もよく売れるようになったそうだ。

原詩はイエツが思いを寄せる女性に、年が老いても、彼女の敬虔な魂を愛していると誓う内容だが、趙照はこの歌は自分の母親のために書いたと言う。音楽の夢を追いつけて故郷を離れた三十代の歌手がステージに立ち、こみあげる気持ちを抑えながら、年を取っていく母親への思いを、ごく素朴な言葉で語る場所はとくに胸に響いた。

ここに挙げた素材は、どれも中国語の表現を一言一句吟味して学ぶのに適していると考え、実際授業でも使ったものである。気が付いたら、かなり私好みの偏った内容になってしまっているかもしれない。心地よい音、洗練された文章、素朴ながらも気持ちが伝わる話し言葉、これらを大切にしながら、皆さんに美しい中国語の世界に踏み込んでもらいたい。

映像・インターネットで親しむドイツ語

リベラルアーツ研究教育院外国語セクション

教授 山崎 太郎

マッターホルンの登り方

Matterhorn ist höher als der Berg Fuji.——ドイツ語初級の授業が形容詞・副詞の比較級にさしかかったとき、練習問題にこんな一文が出てきた。日本語に訳すと、「マッターホルンは富士山よりも高い」。だが待てよ、今どきの東工大生はマッターホルンがそもそもどこにある、どんな山なのか知っているのだろうか？

こんなとき、インターネットはとても便利だ。Googleに「マッターホルン」と打ち込んで画像検索すれば、スイスの観光ポスターなどでおなじみの三角錐の山容がたちまちいくつも出てくるし、Wikipediaを見れば、この山がスイスとイタリアの国境に位置するアルプス屈指の名峰であることもすぐにわかる。さらにYouTubeで検索すると……ヤバい！ おびたしい量の魅力的な映像が目の前に現れたではないか。このときから、私は授業のための補助資料の収集という当初の目的も忘れて、中毒患者のように数多のマッターホルン動画を見ずには一日が始められなくなってしまったのである。

1865年7月、イギリス人エドワード・ウィンパーは6人の仲間とともに、それまで難攻不落と思われたこの山の頂をきわめたが、下山の途中に悲劇的の事故がおきる。一人が足を滑らせ、命綱につないだロープが途中で切れて、7人中4人が1000メートルも下にある谷底まで一気に転げ落ちていったのだ。このあまりにドラマチックな結末に至る山行のプロセスをウィンパー自身が綴った『アルプス登攀記』（浦松佐美太郎訳、岩波文庫）を読んで以来、マッターホルンは私の憧れの山となった。これまでの人生で山麓の村、スイスのツェルマットを訪れる機会があったものの、もちろん岩登りも冬の雪山も経験したことのない私がアルプス登山に挑戦できるはずもなく、その威容を見上げては、初登頂時の事故が起きたのはあのあたりだろうか、上からの景色はどうなっているのだろうか、などと想像をめぐらすよりほかはなかった。

ところが、である。YouTubeで検索すると、日本からの旅行者をはじめ、さまざまな国のクライマーたちが自分でこの山に登る様子を自撮りした映像が次から次へと出てくる。そのうちの多くはウィンパーが登ったスイス側北東のヘルンリ山稜をたどるもので、朝日を浴びて黄金色に輝く岩壁、垂直に切り立った崖、

1000メートル下の谷底など、映像を観るだけで足のすくむような迫力が伝わってくる。一方、南のイタリア側から見るゴツゴツした魁偉な山容は、これが同じ山かと目を疑うほど、スイス側のスマートに屹立する姿と好対照をなしており、季節・時刻・高度による多彩な変化ともども、見ていて飽きることがない。さらには登攀の歴史を記録した英語やドイツ語のドキュメンタリーも数本見つかり、なかには初登頂後の事故を緻密に検証したものもあって、興味は尽きない。

量の上の水練？—ドイツ語の学習者用動画その他

以上のように、YouTube動画は特定の対象について具体的な感触を掴むための情報の宝庫であり、私自身も暖かく安全な家の中にいながらにして、遙か異国の山登りをヴァーチャルに体験できるというわけだが、もちろん、映像を何十本観たところで、マッターホルンに登れる技術や体力が獲得できるわけもない。

このことは語学学習についても、当てはまるだろう。受け身で動画を見ただけでは、分かったような気になっても、本当の力は身につかない。何よりも自分の口を動かしたり、手で文字を書いたりというように、画面のこちら側で体を使うことこそが上達に結びつくのである。ただし、そのことさえ弁えるならば、楽しんで学べる動画は学習の補助教材として大いに利用価値はある。日本人の学習者用にドイツ語の基礎を解説する動画がいくつもあるので、以下に紹介しよう。煩雑になるのでURLは記さないが、YouTubeに下記の太字のタイトルを入れて検索すると必ず見つかるはずだ。

①ドイツ語クラス・川村和宏

岩手大学のドイツ語・ドイツ文学の先生が運営している動画サイトなので、日本でのドイツ語教育の教科書・方法に添った手順で文法知識が学べる。

②ペンギン先生

ドイツに留学・勤務・生活経験を持つ日本人が運営している動画サイト。オーソドックスな文法解説で進む『ドイツ語入門』『大人のためのドイツ語講座』、ゲーテ・インスティトゥートが行なう世界共通のドイツ語検定試験に対応した『ドイツ語をドイツ語で学ぶ』『Goethe-Zertifikat Prüfung』など、コンテンツの種類・数も多い。

③ Nana マルチリンガル

ドイツ語文法の解説には、各動画に対応した練習問題がリンクしている。そのほか、ドイツ語ニュース記事の読解解説、ドイツの社会・生活、日本との文化比較などのコンテンツも豊富。

④ Lingster Academy

ドイツ人女性がドイツ語でドイツ語の発音や文法について解説。進み方はゲーテ・インスティトゥート仕様に对应。

以上のほか、私が見逃している YouTube の語学学習動画もまだいくらでもあるはずなので、その中からどれを選んだらよいか、悩ましいところだ。解説がすっきり頭に入ってくるかどうかは自分自身との相性もあるので、まずは例えば「人称代名詞」という一事項に絞って複数の動画を見比べながら、自分に一番合いそうなものを選ぶとよいだろう。

とはいえ、どれを選んでも解説は詳しく、コンテンツの数も多く、きちんと見てゆこうとすると、それなりの時間がかかるのは覚悟しておかなければならない。それならば、解説はざっと文字で流し読みし、実際に自分で練習問題を解いてゆくという形式で学習を進め、行き詰まった事項についてだけ、上記の動画解説に援助を求めるといった手がある。その点でお薦めのサイトがあるので紹介しよう。

⑤ 東京外国語大学言語モジュール

オンライン語学講座（入門～初級）

発音、会話、文法、語彙の4つのモジュールから構成されており、どこからでも学習可能。紙媒体の参考書・問題集と違って、音声と映像で会話を視聴でき、練習問題も答を打ち込むとすぐに正解かどうか分かって、ゲーム感覚で学習を進められるのが魅力。ドイツ語だけでなく、日本語・英語を含めてなんと27の言語を網羅。私自身も、他の語学がどんなものかを知りたくなったときなど、即席で勉強するのに重宝している。

⑥ 朝日出版社 学生用音声ダウンロード・コーナー

ドイツ語の教科書・教材出版業界でいち早くコロナ禍の状況に対応し、オンライン学習のための便宜をはかったのが同出版社。現在でも上記サイトを開くと、教科書数十種類の音声教材がダウンロードできるようになっているが、そのなかでお薦めは『ドイツ語の時間〈恋するベルリン〉』と『同〈ときめきミュンヘン〉』の特設 HP。練習問題のほか、字幕の種類や有無を切り替えられる短めの動画がたくさん入っている。

ヨーデル節のまわし方

語学学習用以外にも、ドイツ語圏の歴史、社会、文

化、生活を知るうえでお薦めしたいサイトはたくさんあるが、挙げてゆくとキリがなくなる。ここからは私がマッターホルンの動画に行き着いたのと同じ方法で、各自、自分が興味を持つトピックを打ち込んで検索してほしい。例えば訪れてみたい町や観光名所、自動車、ビールやソーセージ、サッカーや卓球などをドイツというキーワードとともに調べれば、想像したよりはるかに多くの具体的な情報にアクセスできるだろう。ここでは一つだけ、音楽のジャンルから、日本人の視野には入りにくいトピックを紹介して、本稿の締めくくりとしよう。

石井健雄という人物をご存知だろうか？ 高校時代、たまたま耳にしたレコードからヨーデルに魅せられた彼はひそかに歌手を志して20代半ばでドイツに渡り、現地の女性と結婚、バイエルン地方のある村に住んで、70歳を超えた現在もヨーデルを歌っている。ドイツ語圏ではこの分野のマイスター（名人）として知られる彼が日本で初めて紹介されたのは30年近く前のテレビ番組だが、その録画が今でも『ヨーデル伝説（タケオ・イシイ伝説）』というタイトルでアップロードされているのだ。この動画を見て興味が湧いたら、Takeo Ischi（s と h のあいだに、ドイツ語風に c の一文字が入るので注意されたい）という名で検索をかけてみよう。彼を一躍有名にしたヒット曲 "bibi Hendl"（めんどりコッコ）をはじめとするヨーデルがいろいろと聴けるはずだ。ある対象に惹かれ、裸一貫で異国の環境に飛び込み、人並み外れた努力を重ねて、ひとつの道をきわめる——そんな彼の勇気と情熱とどこまでもポジティブな心持ちがそのまま、天真爛漫な歌声とめくるめくヨーデルの節まわしとなってストレートに伝わり、コロナ禍の巣ごもりで鬱々と曇った聴き手の気持ちも、「あんな声がヨ一出るな……」という感慨とともに、一気に晴れ渡ることは間違いなしだ。

読者を意識して書く — 曖昧な口語をチュータリングする —

リベラルアーツ研究教育院外国語セクション

ライティングセンター・ディレクター 准教授 小泉 勇人

はじめに — イギリスのご飯は「クソまずい」？

筆者が担当する英語必修授業にて、東工大生の発した「クソまずい」という口語に驚きました。オンライン授業時の出来事で、チャットに書き込まれた言葉です。イギリス人女優によるイギリス料理の実食レポート（YouTube）をディクテーションする活動です。これを書き取ることで、リスニング力を増強し、ついでにイギリスの食文化についても理解を深める趣旨でした。

活動前の呼び水として、筆者は受講生に「皆さんはイギリス料理についてどんなイメージを持っていますか？」と尋ねたところ、チャットに最初に書かれたのが上記の発言でした。意図はわかりますし、この類の印象はむしろ期待していたものです。だからこそリスニングを通じてイギリス料理の奥深さに触れ、固定観念が崩されるだろうという見込みでした。問題なのは言葉の選択です。チャットにせよ教員と交わす公的な発言の場ですから、書き言葉で書くのが適切でしょう。しかし「クソまずい」という書き込みからは、読者が誰で、どのように読まれるかを意識した痕跡は窺えません。

やや不安になったのは、これがチャットではなく、学生が書く学術的文章内であったらどうだろうと想像したからです。もちろん、東工大生が書くそれなりの量の日本語文章を五年近くに渡って見てきた限り、ここまでの卑語を目にしたことはありません。とはいえ文章は文章です。チャットで教員に向けて発する言葉遣いと、学術的文章の中で用いる言葉遣いの間の境界は、とりわけ大学初年時においては存外曖昧なものではないでしょうか。「クソまずい」が昨今の大学生の国語力を巡る何かの前兆でなければと願うところです。

さて今回はそういった背景を踏まえ、とりわけ学生の英語文章に見られる口語的な表現を取り上げ、文章指導（チュータリング／ピアレビュー）の方法を紹介します。ここで文章指導者（チューター／ピアレビューアー）にとって鍵となるのは「口語は極めて曖昧な言葉遣い」だという観点です。ここでの文章指導はライティングセンター、教養卒論クラス、ピアレビュー実践クラスを想定しています。つまり、批判は控え、間違いを直接は指摘せず、また提案も控え、その上で書き手に自分の文章について違和感を抱かせ自ら書き

直しを考えてもらう教育活動を指します。具体的に取り上げるのは(1)卑語、(2) good/bad 表現 (3) “Do you know...?” 表現の三点です。これらに対する共通のチュータリング的発想は、「その口語を使うことで書き手は何を伝えたかったのか」に尽きるでしょう。



S**t boy とはどのような boy なのか？ — 卑語

英作文の提出課題で s**t boy という表現を目にしました（原文では伏せ字なしで表記）。映画『フォレスト・ガンプ』における2分程度の場面を見てもらい、その描写と解釈を英文で書いてもらう課題です。最初、学生の提出文章に書かれた s**t boy という表現には首を傾げました。卑語である以前に、意図がわからなかったのです。改めて前後の文章を読みながら動画も見返し、気がつきました。書き手は「いじめっ子」と書きたくて s**t boy と表現したのではないかと。確かに動画は、少年時代の主人公がいじめっ子から逃げるという場面です。ではこの書き手を目の前にしたチュータリングでは、どのようなアプローチが有効でしょうか。

確かに卑語であることを直接的に伝えることも重要な仕事です。「s**t は卑語で、非英語母語話者が考えている以上にドギツイ言葉遣いですよ」と伝えるのは、英語教育の観点からはあり得る指導です。

一方、チューターなら卑語の抱える曖昧性を問います。例えば、「ここで s**t boy とあるけど、どんなことを伝えたくてこう書いたの？」と尋ねるのは有効です。s**t boy が上記の仮説通り「いじめっ子」を指しているのだとすれば、「じゃあ、英語で『いじめっ子』ってどう表現するかは分かるかな？調べてみるのはどう？」と話し、書き手が自ら文章修正に向かって動けるよう支援することができます。書き手が自ら s**t 以外の言葉を探ることが見込まれ、結果的に直接指摘するのと同じ結果を得られ、主体的な書き直しに繋がります。

どのように good/bad なのか？ — 曖昧な形容詞

曖昧な形容詞は読者を混乱させるものです。大雑把

で曖昧な形容詞は口語的とも言え、英語の文章課題における形容詞 good, bad の無自覚な乱用はその一例です。文系理解を問わず、そもそも学術的な文章で良い/悪いの価値判断が入る余地はあるのかという疑問もあります。しかしより重要なことは、書き手は曖昧な形容詞を書きつつも実際は何を伝えなかったのか、という点です。

チューターなら何がどのような意味で good/bad なのかを問います。よりの確な形容詞はあるもので、よくよく話を聞いてみると、書き手は good と書きつつ実際は「親切的な」(friendly, kind)、「適切な」(appropriate)、「理にかなった」(reasonable) と伝えたいのかもしれませんが。bad と書きつつ実際は「性格の悪い」(mean)、「法に反した」(illegal)、「暴力的な」(violent) と伝えたいのかもしれませんが。あるいはそもそも形容詞以外の表現を使って文そのものを構成し直す方向もあります。

支援にあたって「これは口語だから/曖昧だからこう直したらいいよ」とすぐに問題の指摘や提案を行うのは軽率です。上記のように、書き手の意図により様々な可能性があるからです。少なくとも、書き手と対話しながら複数の修正候補を並べれば、どれが書き手の意図に合っているのかを考えてもらえます。ここで目指すチュータリングとはあくまでも、書き手の伝えなかったことを確認し、それを上手く言語化できるよう支援することです。

“Do you know ...?” は馴れ馴れしい？ — 序論の書き出し

受講生が英語で書いた序論 (introduction) を読むと、“Do you know...?” で始まる一文が頻りに目に入ります。「...」には中心的な話題や、それに関する名詞が入ります。しかしどうにも意図が分かりづらい文です。そもそも「...を知っていますか？」と開口一番に読者の知識の有無を問う必要があるのでしょうか。そのトピックについて読み手に関心を持ってもらいたいのであれば、このような前置きは廃し、手早く論に踏み込むべきでしょう。

読者の知識の有無を問いたしたいというよりは、書き手としては修辭的にトピックの導入をしたい、というのが実際でしょう。少なからぬ非英語母語話者が読み手の知識の有無を問うところから英語の序論を書き出すのは興味深い現象ですが、いずれにせよ、読者からすれば書き手の意図は曖昧です。これは私個人の感覚でもありますが、“Do you know...?” と問われると、自分の知識量について値踏みされているような気がします。このような問いかけはある種の「馴れ馴れしさ」を帯び、口語的な響きは拭えません。

書き手の意図が曖昧なら、それを尋ねてから一緒に修正案を考えるのが文章チュータリングの王道です。

読者の興味を惹きたいのであれば、その知識の有無を「馴れ馴れしく」問いたす以外にも方法はあるはずです。例えば、背景となった出来事や、そのトピックを巡る逸話から序論を開始する方法があります。あえて短いセンテンスで主張を断言する書き出しも、読者の注意を引くには十分です。また、シンプルにキーワードの定義を書き出すのも有効でしょう。

要は書き手がどのように書きたいと考えているかです。「Do you know...? と書くことで、どのような効果を狙ったの?」、「Do you know...? の他に思いつく書き出しはある?」、「トピックの導入をしたいなら、他にどのような方法がいくつかありそう?」といった問いかけがチュータリングにおける有効打でしょう。もし Do you know...? 以外の案を書き手が提示できたなら、「その伝え方がより客観的な視点に立った文体になりそう?」といった問いに繋げることもできます。

終わりに

学生の英語文章に見られる口語的な表現に焦点を当て、卑語 (s**t)、形容詞 (good/bad)、序論の問いかけ (Do you know...?) といった具体例に対して文章指導の方法を提案してきました。口語は曖昧で大雑把な言葉遣いでもあることから、格好のチュータリング対象であると言えます。東工大ライティングセンター、教養卒論クラス、ピアレビュー実践クラス内での活動含む文章指導において、書き手の意図を尋ねる技術が発揮されればと願います。書き手が読者を意識し、曖昧で口語的な言葉遣いを抑制し、よりの確な言葉を選択して読者を上手に案内できるようになることを願って止みません。

最後に、筆者が担当した英作文授業の受講生に、そして東工大ライティングセンターの利用者に感謝を捧げます。本稿の執筆にあたり多くのヒントをもらいました。

新任教員のご挨拶：東工大着任に至るまで

リベラルアーツ研究教育院外国語セクション

准教授 赤羽 早苗

皆さん、こんにちは。2021年の4月に着任しました、赤羽早苗と申します。着任前はアメリカ・ニューヨーク市にあるニューヨーク大学で主に幼児教育政策、ソーシャルエモーショナルラーニング(SEL)について幼児教育現場での活動や研究を進めてきました。現在、学部1・2年生の必修英語科目、学部・大学院の選択英語科目、また文系教養科目のアメリカ学を担当しています。アメリカ学では、アメリカでの制度的差別による人種差別や白人至上主義について、歴史的考察を中心に講義をしています。

私が専門とする幼児教育政策と制度的人種差別・白人至上主義、はたまたSELと、全く関係のないトピックのように見えるかもしれません。実際多くの方に「なぜそのような多分野に手を出すのか」と疑問に思われたこともあります。ただ、私にとってはこの別々に見える点(トピック)が一つの線で繋がり、円になっているイメージがあり、どの点も今の私にはなくてはならないものです。今回はそのことについて、簡単ではありますがお話をさせていただければと思います。

アメリカに20年近く住んでいましたが、「人種」は個人的にも常に関心のあるトピックでした。実際に日本人の私はアメリカでは「アジア人」として扱われ、時にアジア系の顔であることや肌の色、名前等、自分ではどんなに努力しても変えることのできないことで差別される経験をしたからだと思います。この経験から「他の人種の方々はどんな経験をして、どのように感じているのだろう」と疑問を持つようになり、大学院で人種を取り上げる授業を履修し始めました。そして教育政策に興味を持ち、それに関係する社会学、教育の歴史や哲学について学ぶにつれある一つのパターンに気づき、更なる疑問を持つことになりました。

そのパターンとは、授業で扱われる理論や哲学、概念のほとんどがヨーロッパや白人によって作り上げられたものをベースにしている、ということでした。アジア人の私が「アジアにも素晴らしい教育哲学がある」「アメリカに住むアジア人はこんな経験をしていて、アメリカで一般的だとされる経験と一致しないかもしれない」と力説しても、やはりアメリカでの「普通」とされているヨーロッパやアメリカの(白人)文化に基づくものでなければ軽視され、受け入れられることはほとんどありませんでした。人種のるつぼと呼ばれるアメリカで、その「普通」とされる基準によって有色の子どもたち、有色の学生、有色の人々は評価され、「できが悪い」とレッテルを貼られます。そのような経験を経て次第に劣等感を刷り込まれていく…まさに私が身を置いていた教育学界

限で、日常的に起きている白人至上主義的な状況に疑問を持ち始めたのは、博士過程1年目の頃でした。

そこで私は心理学を副専攻に選び、有色、特に黒人の方々の心理や、アタッチメント・心理的安全性について学んでいくことになりました。家庭や学校における心理的サポートを政策化することで、社会から刷り込まれる劣等感を防ぐことができれば、有色の子ども達も幼少期から心身ともに健康に成長することができると考えたからです。もちろん、歴史的な背景を踏まえると、解決策はそんなに単純なものではありませんでした。当時は読解力や数学などのアカデミックスキルが極端に重視され、心理的サポートは「ソフトスキル」で必要なものではないとされていましたが、私はその頃からあらゆる場面において、積極的に心理的サポートの重要性を訴え始めました。

そして、博士課程修了後に転機が訪れます。幸いにもニューヨーク市で私と同様に考える人々に出会い、心理的サポートに焦点をおくSELを幼児教育現場で実施するための業務に関わることになったのです。ニューヨーク市では幼児教育無償化政策の一部としてSELが取り入れられ、教職員がトレーニングを受講し、コーチやコンサルタントのサポートを受けながらSELプログラムが学校内で実施されています。教職員の皆さんや子ども達、保護者の皆さん、そして心理的サポートの重要性を共有できる同僚との幼児教育現場での経験は、何にも変えがたい、これからの私の研究・教育には無くてはならないものとなりました。

このようなアメリカでの一連の経験を通して、一見すると関連の無さそうに見える点(トピック)である教育政策・人種問題・SELが繋がり、私のライフワーク(円)になったと感じています。それもこれも、自身が大切にしているものを、あらゆる分野の方々に共有したことで関心を持っていただき、様々なご縁を経て実現できたことでした。今後は、同様に日本でもSELを普及してけたらと考えております。

今回、東工大で教鞭を取らせていただくことにあたり、学生の皆さんには社会で「普通」や「当たり前」と捉えられている概念に疑問を持ち、ご自身の専門分野で問題解決にどう貢献できるのか考えられる力をつけていっていただきたいと考えています。その過程で会話やエッセイ・SNSなどを通してご自身の想いを発信・共有しながら、社会貢献を共創していける仲間とのネットワークを国内外で広げていってほしいと思います。微力ではありますが、私が担当する英語や文系教養科目でそのお手伝いができれば幸いです。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

東京工業大学リベラルアーツ研究教育院 外国語セクション

外国語だより Vol. 6

VOICES FROM THE FOREIGN LANGUAGES SECTION, INSTITUTE FOR LIBERAL ARTS, Vol. 6

発行日 令和4年3月1日

発行所 〒152-8552 東京都目黒区大岡山2-12-1
東京工業大学リベラルアーツ研究教育院 外国語セクション
TEL 03-5734-2287 FAX 03-5734-2938

発行者 上田 紀行

編集者 田村 斉敏・戦 暁梅

印刷所 株式会社鮮明堂